

日本の名作名文ハイライト

蜜柑

芥川龍之介

朗読
voicedrop

出所
朗読三昧

<http://www.voiceblog.jp/voicedrop/>

teabreak 編

蜜柑

芥川龍之介

ある曇った冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電灯のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、ただ、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立っていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中にはいいようなない疲労と倦怠とが、まるで曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじっと両手をつっこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようという元氣さえ起らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずると後ずさを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何かいい罵る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががりりと開いて、十三四の小娘が一人、慌しく中へはいつて来た、と同時につずしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットフォームの柱、置き忘れたような運水車、それから

車内の誰かに祝儀の札をいつている赤帽——そういうすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行った。私は漸くほっとした心もちになって、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い眊をあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を——瞥した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結って、横なでの痕のある鞆だらけの両頬を気持の悪い程赤く火照らせた、いかにも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れ下った膝の上には、大きな風呂敷包みがあった。そのまた包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との區別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心もちもあって、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電灯の光に変わって、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。いうまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいったのである。しかしその電灯の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡なでき事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、流職事件、死亡広告——私は隧道へはい

った一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間ももちろんあの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に座っている事を絶えず意識せずにはいられなかった。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうしてまたこの平凡な記事に埋まっている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を放り出すと、また窓枠に頭を寄せながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頬に窓を開けようとしている。が、重いガラス戸は中々思うようにはあがらないらしい。あの戦だらけの頬はいよいよ赤くなつて、時々「鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしなく耳へはいつて来る。これはもちろん私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今「將に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点の行く事であつた。にも関らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、

それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとしか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えながら、あの霜焼けの手がガラス戸を上げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとしたガラス戸は、とうとうばかりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になって、濛々と車内へ漲り出した。元来一咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程一咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電灯の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るくなって、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかったなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、また元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、ある貧しい町はずれの踏切りに通りかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根が

ごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、ただ一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺っていた。やっと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃って背が低かった。そうしてまたこの町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振ったと思うと、たちまち心を躍らすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降って来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た私たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、

ある得体の知れない朗な心もちが湧き上って来るのを意識した。私は高然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変鞆だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……………

私はこの時始めて、いいようのない疲労と倦怠とを、そうしてまた不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事ができたのである。